

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

※生成 AI による要約を行なっています。

令和 8 年 3 月 6 日 中津川栗振興会

(司会)

市民と市長との対話集会の開催について参加者に感謝を述べ、進行を開始する。

(会長)

中津川振興会会長の塚本である。前会長の原さんが対話集会を提案し、昨年 5 月に亡くなった後、会長を引き継いだ。

本日は栗生産者の高齢化問題と産地の未来について 4 つのテーマで対話する。生産者の現状、後継者問題、収穫作業の応援、栗団地の可能性を議論する。

(市長)

市長就任から 2 年が経ち、今回で 46 回目の対話集会である。中津川市は広く、さまざまな団体や地域の声を聞いて現状を把握し、今後の取り組みを検討している。

(参加者)

60 歳定年後に栗栽培を始めて 9 年になる。父の死後 1 年のブランクがあったが、剪定師制度に助けられた。定年延長で 70 歳近くから始める人が増え、後継者問題が深刻である。

(参加者)

西部土地改良事業で 54 年に水路が完成し、46 年が経過した。栗園は現在が最も良い時期で、東京での栗きんとんの人気も高い。10 年先を見据えた新規栗園の増産が必要である。

(司会)

次の発言者。

(参加者)

栗畑 8 反で成木 240 本、幼木 60 本を栽培している。親父の後を継いで 7、8 年になる。肺癌を患い抗癌剤治療中で、5 人に作業を依頼している。息子は継がないと言っている。

(参加者)

2016 年に父から農業を引き継ぎ 10 年になる。20a の栽培面積で 1 人作業、

収穫時は妻が手伝う。74歳で肩や腰の調子が悪く、息子は農業に関心がなく後継者問題を抱えている。

(参加者)

養蚕から栗栽培に転換して40年、5反を栽培している。塚本先生の指導と先輩の助言、超特選制度による価格向上で継続できた。後継者がいないため、誰かに引き継ぎたいと考えている。

(市長)

中津川の栗きんとんは全国的に人気が高く、東京駅での催事では開店前から行列ができる。地元産栗を使用することがブランド価値を高めている。中津川・恵那の菓子屋さんと全国の栗生産者との交流の場に参加したが、とても勉強になった。

(司会)

栗の後継者問題について、剪定講習会やチャレンジ塾を開催しているが課題が残る。生産者の親族以外や地域外からの誘致について市との連携可能性を質問する。

(市長)

移住希望者で農業志向の人は存在するが、栗だけでは生活が困難で他の作物との組み合わせが必要である。住居と収入の確保、栗栽培の魅力発信が重要である。20代から40代の若い移住希望者が多い。

(参加者)

栗だけでは生活困難でプラスアルファが必要である。適切な面積での栽培と他の仕事との両立が現実的である。栗きんとんの里として栗の存在をPRしていきたい。

(市長)

中津川の栗きんとんブランドは確立されており、リニア開業後の自然体験観光の核として栗拾い体験などを活用したい。農業体験全般で中津川の魅力を発信する構想がある。

(参加者)

他地域の方からは、栗きんとんの食べ比べができるなど、菓子屋さんに競争意識があると、良い意見をもらったことがある。神坂スマートインター開通後の観光ル

ート構築が大きなテーマの1つになる。

(市長)

他地域とは、お互いに高め合っていければいい。市として、やっていくべきこと、できることを、市民の皆さんからご意見をいただけるとありがたい。

(参加者)

全国に栗拾い施設があるが、栗は時期が短い。マロンパークの年間を通じた活用方法が必要。ブルーベリーなど他作物との組み合わせや栗きんとん販売など、工夫の余地はある。

(市長)

剪定や栗拾いを依頼できる人材はいるか。

(参加者)

一日中は無理でも手伝いたい人は多いが、マネージャーが必要。

(参加者)

栗拾いは誰でもできるが剪定作業が困難で、組合で希望者に対応している。剪定技術の習得には長期間を要する。

(市長)

剪定講習会は SNS で見る機会も多い。

(参加者)

剪定技術習得には数年を要し、樹齢に応じた技術が必要である。組織化された支援体制の必要性を感じている。

(市長)

隙間時間労働者の活用が必要。また、市としても職員の副業規制緩和を検討中である。職員の地域活動参加による相互利益を図る構想がある。隙間時間バイトアプリ活用も含めた労働力確保策が大事。

(参加者)

市の農政担当職員の農業理解促進と相談体制も充実してほしい。

(市長)

農業分野のスペシャリスト職員の育成は重要。専門性を持った職員配置を検討している。

(司会)

将来的に、中津川地区に栗団地をつくることはできるか。

(市長)

現在新たな栗団地計画はないが、生産者からの具体的提案と国県の補助金活用により実現可能性はある。場所、規模、運営者などの課題整理が必要である。

(参加者)

栗団地成功には長年の落ち葉堆積による良質土壌が必要で、新規開拓地では困難である。既存の適地探索と後継者育成への効果を期待している。

(市長)

国県の補助金活用と売り先確保が重要。栗は他の農作物と比べて明確な販路があることが最大の強みである。

(参加者)

超特選栗は特定の店舗向けの規格品で、栽培基準と技術者認定が必要である。開始当初は通常の倍価格だったが現在は価格差が縮小している。

(市長)

ポロタンなど新品種の存在と中津川栗の販売力を評価し、栗団地の場所確保ができれば実現可能性は。

(参加者)

リニアガイドウェイ建設地のあたりは、地権者の多くが農業継続を希望せず、立地条件も良好である。農地保全の観点からも適切である。

(参加者)

ポロタンがふるさと納税の対象になり、とても助かっている。

(市長)

ふるさと納税は、市の財源としてもっと増やしたい。ぜひ生産者の皆さんには、お

力添えをいただきたい。

中津川市は、東濃 5 市のうち、最高額の 10 億円を達成した。訪れていただくきっかけにもなっている。

(会長)

短時間だったが今後も継続的な協力関係を築きたい。ありがとうございました。

(市長)

栗畑視察や剪定・収穫時期に現場を訪ねたいと思う。ありがとうございました。